

## 漱石の英国留学とその成果のゆくえ

相浦 玲子

### 現代における漱石の受容

夏目漱石は、紙幣の図案に使用されるほど日本では親しまれた作家である。彼は当然、近代日本を代表する作家として国文学の歴史の中に不動の位置を保っている。漱石は、作家としては非常に遅い出発をし、その死までに十年余の作家活動を行っただけだが、明治から昭和にかけてどの時代にもまんべんなく、大きな出版社が競うように作品を出版していることがわかる。例えば、『坊ちゃん』は、昭和初期(昭和4年)に文庫本として、(二月に改造社、七月に岩波書店と春陽堂というふう)に三社から出版されている。大正時代には、岩波書店が三度、版を改めて『漱石全集』を刊行している。その後、昭和30年から、昭和42年までのあいだに、実に八社が独自の全集を刊行していることは驚きに値する。

そのような衰えることのない人気の中で、今度は、昭和の後期から平成にかけて(1980年代から現在に至るまで)、漱石への関心の中身は、多彩になり、かつ古典作品としてではなく現代的な意味をその中に読み取ろうという姿勢が加わってきている。特に1999年は多くの評論・評伝が出版されている。ひとつには、百年前の世紀末に生きた漱石に二千年紀を重ねようとし、また漱石の見抜いていたものを予言的に解釈しようとするものである(例えば小森陽一氏の『漱石を読み直す』[筑摩書房、1995年]や『世紀末の予言者・夏目漱石』[講談社、1999年])。このことは、百年というひとつの節目を超えて、漱石が過去の人としてではなく、現代にも通用する考えを持ち、われわれの時代を先駆的に生きた人として捉え得る人物だったからであろう。

小論においては、漱石は英国留学からどのようなものを得たのか、そしてそれは、どのように彼の作品なり思想に生かされていたのかその一端を探ってみたい。

### 英国留学と作家、漱石

漱石は、留学を転機にして、帰国後、作品を書き始めたといえるが、その作家としての出発は他の多くの作家に比べると遅いものであり、またそのため作家である期間もさほど長くはなかった。しかし、その作品の量は決して少なくはない。漱石をこのように作家活動に駆り立てたものは何かと考えたとき、当然、英国留学があげられよう。漱石の時代の留学の状況は、現在とは全く異なっていた。現在のように、経済的な問題さえ解決すれば、行きたい人が行きたい時に留学できるという時代ではなく、選ばれた人が、国費で派遣されるということが主流の時代であった。もちろん、強制的という訳ではないので、意志がなければ行かないことも可能だったであろう。漱石は、留学に関して肯定的な気持ちと、否定的な気持ちをいだいていたようである。

漱石は、『文学論』の序において、留学が積極的なものでなかったことを次のように書いている、「本校[=第五高等学校]は只足下[=漱石]を文部省に推薦して、文部省は其推薦を容れて、足下を留学生に指定したるに過ぎず、足下にして異議あらば格別、左もなくば命の如くせらるゝを穩当とすと。余は特に洋行の希望を抱かずと云ふ迄にて、固より他に固辞すべき理由あるなきを以て、承諾の旨を答へて、…」(p.3)とあり留学自体の是非についての強い意思は持っていなかったようである。しかし今度は、漱石は「英文学」の研究のためなら留学してもいいと思ったが、文部省は「英語」を研究するように命じたことに納得のゆかぬ思いを抱く(p.4)。そして文部省を訪れて委細をただし、結局、それほどこの言葉に束縛されなくてもいいとの言質を得てようやく得心したというような強いこだわりを見せている。

そしてこの問題を解決してようやく留学の命令を受諾したのだった。

彼は英語が堪能であったといわれていて、実際彼の書き残した英文は流麗でなかなかのものであるが、音声面では、録音教材があるわけでもなく、生きた教材が現代のようにあるわけでもなかった時代であって、外国語の習得は非常に困難であったと思われる。

漱石は、この留学の機会を与えられたと同時に、自己の意志でこの機会を捉えて、英国行きを成し遂げている。しかし、彼はこの留学によって英国の文化を諸手を挙げて自己の内に受け入れたわけではない。また英国に漱石を温かく迎え入れる特別な素地があった訳ではない。当時、ロンドンには、商社などから派遣された日本人たちがかなりいたようであるが、彼らが比較的裕福であったのに比して、漱石は経済的にかなり苦しい立場に置かれていた。漱石は英国留学後に著わした『文学論』の序の中で、この留学が到底、愉快なものではなかったことを述べている。しかし、だからといって留学時に見聞したものをすべて否定的に解釈しようと思った訳でもない。漱石は、最初、ケンブリッジに足を運んだり、またロンドン大学(キングズ・カレッジ)では何度か聴講してみたりして入学の可能性を探ったようである。しかし、彼は授業料の点や、またケンブリッジ大学についてはその階級制度の上に立脚した生活に馴染めそうにないと思ったことから入学を断念している。

彼は日本にいるときから、ケンブリッジとオックスフォードの二大学が、英国社会において、またひいては世界の中で、どのような意味をもつのかは承知していたと思われるが、実際にケンブリッジ大学にいる知人を訪ねてみて、自分には「合わない」と悟ったのだった。彼はオックスフォード大学もこれとほぼ同じ雰囲気であろうと推測し、最初から訪れることすらしていない。「費用の点に於て、時間の点に於て、又性格の点に於て到底此等紳士の挙動を学ぶ能わざるを知って彼地に留まるの念を永久に断てり。」(p.5) としていることは注目に値する。なぜなら費用の件と留学期間については彼の力の及ぶところでなかったことは理解できるにしても、「性格」の点というのは、異文化の中でまさにこれから生活を始めるためにやってきた人間にしては意気地がなさすぎるように聞こえるからだ。

しかし漱石の理由づけは、個人的に「合わない」から避けたいという皮相な拒絶反応にもとづく判断だけではないと思われる。漱石が、この中流の上以上の階級で小さいときから特別な教育を受け、階級に固有の「特別な」英語を話す人たちが、独自の文化コードの中で暮らしている、つまり階級制度が如実に日々の生活の中にまで現れている大学を前にして、おそらく、閉鎖的な英国のエリートの社会の中に異邦人として、そのままで入り込むだけの心構えも素地もないと考えたことは想像に難くない。また、そのように限られた社会に身を置くことによって、社会の支配者層、エリートの思考は身についても、それ以外の99.9%以上の、「他の」英国国民の暮らしは見逃してしまうことになり、文化を学ぶために異国から来た、異文化を持つ人間として、それはふさわしくないと考えたのかもしれない。何よりも限られた年月と予算の中で、彼は名称という表面上の名誉よりも少しでも自己が納得のいく形での滞在をしたいと考えたのであろう。少なくとも、異国からやってきた漱石が、歴史と文化を背負ってその国の最高峰に立つ大学で、幼いときから紳士になる教育をすでに受けてきている人々に伍して、自己を失わずに、地に足のついた生活を急に始めることなどは無謀であると考えた判断は、ひとつの見識といえるだろう。あるときには偏屈なまでの「こだわり」を持つ漱石にとって、納得のいかない、意味の理解できない物真似をしてお茶を濁すことは、到底耐えられるものではなかったのだ。

彼は、スコットランドやアイルランドに行くことも考えたが、これも結局、消去法的に否定し、ロンドンが「語学を稽古する場所としては . . . . 尤も優れるを認めたり」(p.5) として、これを選んでいる。もっとも実際には、言語的には、首都の言語なら妥当であるかということ、そう話は簡単ではなく、ロンドンの町中では、その地域の狭さゆえ「標準語」とは言い難いコックニーと言われる下町言葉の「方言」が話されている訳であるから、彼の意図は必ずしも的を射ていたとはいえない。しかし、ロン

ドンは何んといっても政治・文化の中心地として学ぶうることが多かったことは言うまでもない。

「留学」はしたものの、結局、経済的、社会的な状況から大学への留学は断念した。彼は、「此機を利用して一冊も余計に読み終らんと目的以外には何等の方針も立つる能はざりしなり。」(p.7)と考え、相当な覚悟をもって、もっぱら国から支給された留学費用を書籍の購入にあてて片っ端から読書し、シェイクスピア学者のチューターについて週一回程度の個人教授を受けることになった。現代のように日本で洋書が容易に手にはいる時代ではなかったため、書物を購入する絶好のこの機会を逃したくなかっただろうし、ロンドンの書店に並ぶ書物の群に圧倒されたのかもしれない。いずれにしても次の漱石のアドバイスは、彼自身が自己に言い聞かせたことであり、現代にも通じるものがある、

青年の学生につぐ。春秋に富めるうちは自己が専門の学業に於て何者かを貢献せんとする前、先づ全般に通ずるの必要ありとし、古今上下数千年の書籍を読破せんと企つる事あり。かくの如くせば白頭に至るも遂に全般に通ずるの期はあるべからず。余の如きものは未だに英文学の全体に通ぜず。今より二三十年の後に至るも依然として通ぜざる可しと思ふ。(p.7)

漱石は、苛酷なまでに自己に厳しく、下宿に「立て籠って」、しかも文学「以外」の書を読みふけた。それは「日本」という社会から自己を物理的に解放したのとも似ていて、文学という自分の親しんでいる、狭い範疇から自己を解き放とうとして異文化の中に飛び込んだかのように思われる。彼は本を読んでも読んでも強迫観念のように、まだまだ読書が足りないと感じるのだった。ひとつには、本を読んでも、なかなか生活に馴染めない焦りがあったのかもしれないが、これは外界との接触を著しく断っていたせいでもあろう。

## 「自己本位」

日本においてエリートであった漱石は、ここでは言葉もままならず、文化も十分にわきまえない、社会にとって「宙ぶらりん」な存在にすぎないことを悟り、がく然としたに違いない。おそらくそのことが引き金になって極度の神経衰弱に陥っていったようだが、しかしそこで相手の文化を一切否定したり、自己を卑下してしまったりはせず、現実をありのままに受け入れる姿勢を獲得して、やや肩の荷をおろすのだ。漱石自身の言葉によると、

一口でいうと、自己本位という四字を漸く考えて、その自己本位を立証するために、科学的な研究やら哲学的の思索に耽り出したのであります。(…省略…)

私はこの自己本位という言葉を自分の手に握ってから大変強くなりました。彼ら何者ぞやと気概が出ました。今まで茫然と自失していた私に、此所に立って、この道からこう行かなければならないと指図してくれたものは実にこの自我本位の四字なのであります。自白すれば私はその四字から新たに出生したのであります。そうして今のようにただ人の尻馬にばかり乗って空騒ぎをしているようでは甚だ心元ない事だから、そう西洋人ぶらないでも好いという動かすべからざる理由を立派に彼らの前に投げ出して見たら、自分もさぞ愉快だろう、人もさぞ喜ぶだろうと思つて、著書その他の手段によって、それを成就するのを私の生涯の事業としようと考えたのです。

(「私の個人主義」、『漱石文明論集』、pp.114-5。漢字は原文のまま。以下同様。)

そもそも、西洋の学者に伍して西洋の文学を研究するというのは、最初から負い目をおっているようなものなのに、外国文学をなぜ、何のために専攻するのか、自分は何に立脚するのかと漱石は自己を問い詰める。小森陽一氏は、「自己本位」を次のように分析する、

「自己が主で、他は賓であるという信念」は、「賓」としての「他」を排除したり無視したりする立場ではない。「他」があればこそ「矛盾」が認識されるのであり、そうであればこそ、「私の考え」を、「自己」を「主」として理論化せざるをえなかったのである。ここに単独性から普遍性へつきぬけていこうとする漱石の「自己本位」の論理の要がある。（『世紀末の予言者・夏目漱石』、p.270。）

つまり、漱石は自己と異なる考え方にふれることには、自己を再考するときのよすがになると考えるために、自己以外のもの＝他＝異文化は、それ故、尊重しなければならぬということだ。日本文学は外国文学が存在してはじめて「日本文学」と認識される、彼はそこから出発しようとした。

## 文明とその危機

漱石はロンドンで、聞きしにまさる文明の開化ぶり、科学や技術が日本より数段進んだ社会を目の当たりにする。そのとき彼は、利便性が人間にもたらしてくれる時間やエネルギーの省略をすなおに便利でありがたいものであると認めるが、ただそのことが本当に人間に幸福をもたらすかどうかということには、疑問を呈さざるをえなかった。漱石はいう、

... 上代から今に至る長い時間に工夫し得た結果として昔よりも生活が楽になっていなければならないはずであります。けれども実際はどうか？ 打明けて申せば御互の生活は甚だ苦しい。昔の人に対して一步も譲らざる苦痛の下に生活しているのだという自覚が御互にある。否開化が進めば進むほど競争が益劇しくなって生活はいよいよ困難になるような気がする。... （『漱石文明論集』、p.22。）

今から百年以上前のヴィクトリア朝時代後期にあって、漱石はすでに人類の行く末に不安を感じていた。明治33年(1900年)9月8日に横浜を出発した漱石は、フランスを経て、10月28日にロンドンに至る。漱石はロンドンのばい煙に驚かされる。あくる年、一月の日記には二日続きで如何にロンドンの大気が汚染されているかを記載している。そのうちの一箇所をあげてみると、「倫敦ノ町ヲ散歩シテ試ミニ啖[ママ]ヲ吐キテ見ヨ真黒ナル塊リノ出ルニ驚クベシ何百萬ノ市民ハ此煤烟ト此塵埃ヲ吸収シテ毎日彼等ノ肺臟ヲ染メツ、アルナリ我ナガラ鼻ヲカミ啖ヲスル[脱字]ハ氣ノヒケル程氣味悪キナリ」（『漱石全集 第13巻』「日記及断片」、p.30）とある。漱石の英国到着時はすでに気温がかなり低くなってきている季節であり、各家庭で石炭を暖炉にくべて暖房がなされていたと考えられ、これが霧と相まって昼間から薄暗くなっていたのであろう。現在ではむしろこの現象は、石炭を使わなくなり減少しているし、公害に対するさまざまな策も講じられているが、それでも車の排ガスをはじめ、次々襲ってくる新たな問題はあとをたたない。漱石がすでに百年前にいっていた不安は、現代において地球規模の、深刻な問題として存在し続けている。まだ当時は、日本の首都の東京にも存在しなかったようなこれらの問題は、われわれが文明を手に入れた代償として、われわれに直面することを執拗に要求し、現にわれわれを苦しめている。漱石の思いは、われわれが無差別に真似をするだけで、ほしくなかったものまで無批判に容れてしまうことの危険性に及んでいた。

## 物真似と価値観の多様性

漱石は西洋の真似をすることについて述べる中で、物真似を頭から否定する必要はないとして、「... 私は模倣に至極賛成である。」（「作家の態度」『芸の哲学的基礎』、p.95）と言い、また「仮令夢中に真似をするのが悪いといっても、先方の立場その他を参考にするのは勿論必要であります。」（p.97）とし

ている。その意味ではプラグマティックな立場をとるが、安易にすべてをうのみにする態度には大いに批判的である。「作家の態度」という講演の中で漱石は、「しかし人間の内部の歴史になると、またその内部の歴史が外面にあらわれた現象になると、そう簡単には行きませんようです。風俗でも習慣でも、情操でも、西洋の歴史にあらわれたものだけが風俗と習慣と情操であって、外に風俗も習慣も情操もないとは申されない。また西洋人が自己の歴史で幾多の変遷を経て今日に至った最後の到着点が必ずしも標準にはならない。」と、述べている(pp.95-6)。また「私の個人主義」の講演の中でも次のように述べている、

普通の学者は単に文学と科学とを混同して、甲の国民に気に入るものはきっと乙の国民の賞賛をえるに極っている、そうした必然性が含まれていると誤認してかかる。其所が間違っているといわなければならない。たといこの矛盾を融和する事が不可能にしても、それを説明する事は出来るはずだ。そうして単にその説明だけでも日本の文壇には一道の光明を投げ与える事が出来る。— ころ私はその時始めて悟ったのでした。甚だ遅蒔の話して慚愧の至でありますけれども、事実だから偽らない所を申し上げるのです。(『漱石文明論集』p.114。)

漱石は留学後、東京大学での教職に見切りをつけて、不安定な作家生活を選んだ。このように収入の安定と身分の保証を自ら手放すというのは、世間の常識から考えると信じがたいできごとであった。しかし彼は、ひと握りの東京大学生を相手に、難しすぎると言われながら人気のない講義をするより、もっと幅広く多くの人に自分の考えを伝えたい、特に留学体験で得たことを、自分の中で噛み砕いたかたちで小説にして、一回の講義のように消えてしまわず、時間と空間の広がり耐えられる仕事をしたい、と思ったのであろう。

漱石は、このように明らかに、読者にメッセージを伝えることを意図していたことがわかる。つまり、思いつくままに趣味的に小説を書いたり、あるいは、皮相な西洋文化の紹介をしたりするのではなく、また直接的な社会問題を描いた小説を書いた訳でもないが、危機に瀕していると彼が見なしている日本の民衆に対して間接的に何かを伝えようとしていた。

彼の他の作品と比較して、趣きを異にし、また最初から作り上げた作品とは言えないが、小論では『坑夫』に焦点をあてて、漱石と「異文化」という観点から、彼のメッセージを探る作業を以下に試みたい。

### 漱石と『坑夫』— 内なる異文化 —

漱石の『坑夫』は、1908年(明治41年)に朝日新聞に連載された長篇小説で、漱石の新聞社入社後二作目にあたる作品であるが、他の作品と異なり、話の素材は坑夫を経験した青年から提供されたものであり、また本来はもっと時間をかけたであろう小説ながら、実際には島崎藤村が書くことになっていた連載小説の執筆が遅れたために埋め草として急遽、執筆を依頼され、ピンチヒッターの様な役割であったとされている。漱石の経歴には、坑夫としての経験は自身にも身近にもなかったにも拘らず、なぜ自分の話を言わば売りにやってきた青年の鉱山での短い経験談を新聞小説として連載するような気になったのであろうか。もちろん、入社して間もなく文筆で生計を立てる決意をしたばかりの漱石が原稿の締切りと義理立てのために、やむを得ず、間に合わせのために書いたといえそれまでであろう。三好行雄氏の『坑夫』の解説によると、「まず構想の放棄。『坑夫』には、これといって筋らしい筋立てはない。実生活の葛藤に疲れた青年が〈自滅〉を求めて出奔し．．．．．坑内の地獄を地底にまで下降するという希有の体験が描かれる．．．．．ドラマティックな事件はなにひとつ起こらないし、だいいち、この成り行き自体が荒井某の体験にまるごと乗っかっている。」(『坑夫』、p.22)という風に、あまり内面

の変化には触れていない。

『坑夫』にはたしかに外的条件の制約があり、漱石が一から創作した小説でないことは一目瞭然である。しかし逆に漱石は、入社後二作目という大事な作品をただ単に他人まかせの受け売りに終わらせたのだろうか。文学博士号を拒否した一件にも見られるように漱石という何ごとにもこだわる人間が、そう簡単に自我を表すことなく「ゴーストライター」の語った作品に署名だけしたということは考えられない。漱石は、この坑夫を経験した青年から、身の上話を含めて聴いたのだが、この青年が恋愛沙汰の末、保証されていたはずの生活を棄てて鉱山へ行くことになったそれまでの経緯はむしろ『坑夫』の中では省略している。漱石の他の小説の流れからいうと、格好の題材と成りえたであろう題材にはあえて手をつけず、自分では経験をしたこともない鉱山の生活に目をつけたのはなぜだろうか？

『坑夫』の世界は、非常に限られた地の底の世界であるが雑音が少ない、モノトーンでそのため余計に研ぎすまされた感覚、自己との対峙が浮きぼりにされる。漱石が坑夫を経験した青年の話をどのように脚色したかはともかくとして、これほどまでの極限状況にありながら鉱山行きの四人の人物描写の中にも漱石一流のペースとも皮肉とも言い切り難い笑いの要素を備えていることはたしかである。たとえば最初の茶店での揚饅頭の描写や、あるいは「赤毛布」と「小僧」と主人公が名付けた同行の者が、簡易宿に寝ている様を評して、「... 向うの隅に小僧が倒れている。こちらの横に茨城県[＝赤毛布を身にまとった男]が長く伸びている。毛布の下から大きな足が見える。」(p.82)などは、当世風のギャグとも受け取ることができそうなくらいのいきおいである。

『坑夫』の主人公は、二人の女性のあいだで板挟みになり、着の身着のまま東京の実家から家出をする。「暗くなった所を又暗い方へと踏み出していったら、遠からず世界が闇になって、自分の眼で自分の身体が見えなくなるだろう。」(p.8)というほど、この世から身を隠してしまいたいし、また、行き詰まったところには自殺も辞さないという状態で、何のあてもなく歩いている。坑夫になりたいとは考えたこともないが、偶然、長蔵という人物に声をかけられてうまく乗せられて、他に何もあてがなかったので坑夫にでもなろうという曖昧な気持から鉱山へ向かう。鉱山へ行く汽車賃さえ持たず、着ているものも山行きには相応しくないものである。ここから見ても、又文中に時々ほのめかされている彼の背景描写からも、この人物が教育もあり、あまり経済的苦労も知らない、「いい家庭」に育った人間であることがわかる。いわば全く無防備で、鉱山のことは全く知らない人間が坑夫になろうという訳である。

初めて着いた鉱山で、彼は自分がここにいる多くの人間達と如何に異なるかに気づかされている。よそ者で、教育を受けた青白い彼に対する冷やかしいじめは、陰惨である。仲間うちですら、別の仲間の葬儀の様子を死にかけている仲間に見せつけるという、主人公の常識では考えられない無神経さがここでは当たり前のように繰り広げられる。そうして、彼が鉱山の「こ」の字も思いもよらない時に求めていた、文字どおり暗闇の世界が目の前に現われる。彼にとっても鉱山の住人にとっても地の中の世界は「地獄」という認識がある。しかし鉱山に着いてみて、つぶさに坑夫の仕事や生き方を見ていくうちに、坑夫にでもなろうと思っていたのは大きな間違いであったと悟る。主人公は何事にも向き不向きがあり、熟練が必要であることに気づかされる。こうして何もすることが思い浮かばなかったときから、成りゆきまかせて坑夫にでもなろうという軽い気持、そしてその裏には、そうでもしなければあとは自死しかないというような極端な選択肢の中で、背水の陣をしいて何がなんでも坑夫にならなければならないと自分にいい聞かせるところまで行きついた自分に気がつく。人里離れた、想像を絶するような山中に忽然と現れる鉱山には一万人とも知れない人が生活していて、その多くは、獣と違わないような生活状態の中で、南京米を食し、夜毎に南京虫に刺されるような生活を送っていて、そこから抜け出すすがもなければ、抜け出したいという願望すら持っていない、あるいは諦めてしまった人たちのなかである。

## 主人公の成長

そのような過酷な状況の中でも主人公は、元の自分には戻れないことから、鉱山で生きられるだけ生きて、あとは死ねばいいと考える。しかし、そのような中でも、主人公は二、三の同情的な人物に出会い、次第に考えを変えてゆく。これらの経験談は、回想の形で後年書かれたという形式をとっていて、読者は、主人公が健康上の理由から坑夫にはならず、しかし結局この地の底の生活を五ヶ月も続けたことを知らされる。主人公の出会った同情的な人物たちはいずれも学校出で坑夫をしている人たちで、ある意味で主人公と似ているところがあり、一緒に主人公が坑夫になることを思いとどめさせようとする。それは損得勘定抜きで自分の轍を踏ませたくないという思いやりから出ていることはまちがいない。結局、主人公は、この人達の言うことにはすぐには従わなかったが、この人達の存在が彼の心の中に大きな変化を与えたことは確かである。ただ、鉱山生活二日目の健康診断ですでに、彼に残されている生命が非常に短いものであるかもしれない、という悟りは彼にかえって鉱山での生活に、一種の覚悟を与え、以後、冷やかしいじめを何とも思わなくなったという経験もしている。つまり主人公は、鉱山へ行く前と行ったあとでは、明らかに人間的な成長を遂げているのである。

主人公が地の底へ案内されていく姿は、まさに読む者に息苦しく感じられるような迫力のある描写である。主人公は、辞身していることを案内人に悟られるのは愚かしいと考えて、意地をはって、地の底の果てまで降りて行く。そこには、生きている彼が物理的にも精神的にも落ちるところまで落ちて、ともすれば消えてしまいそうになり、千々に分かれる道を手繰りながら一縷の明りを頼りに段々と地上に戻ってゆく姿と大いに重なるものがある。

彼は最後の土壇場で意地を張ったために、案内の坑夫に見捨てられて真っ暗の地下の道に迷う。そして、苦勞の末、一人の坑夫が働いている現場に出くわして、その坑夫に道案内を乞う。この坑夫が、彼には山は向いていないと諭した一人である。主人公は坑夫になるなら進退については答えを留保するものの、「この男に逢ったら、もう一人で出る気がなくなった。死んでも一人で出て見せると威張った決心が急に何処へか行ってしまった。自分はこの変化に気が附いていた。」(p.186)という風に見事にスタンスを変える。

## 異文化にふれる意味

「坑夫」の世界は一見、非日常的な、非常に狭い鉱山の世界を扱ったものであり、一種独特の雰囲気をもった作品である。視点を少し変えてみると、主人公にとってこの世界はほとんど自分と文化を共有することのない異文化社会であり、そこにいる大半の住人とはコミュニケーションを持つことが不可能な状況がある。そしてこの状況は主人公自身が変わることによって変化する。窓から突き出して自分を見おろす坑夫たちの顔が主人公には耐えられなかったのであるが、自分が死というものを自死(自殺)ではなく自然のうちに非常に身近に感じたときに、一種の諦観をもつに到り、現実をあるがままに見るようになる。必要以上に美化することもなく、また、必要以上に悪く見ることもないという境地である。主人公は思う、

今度は愈死ぬ事になりそうだ。(…省略…) 坑夫は世の中で、尤もきたないものと感じていたが、斯様に万物を色の変化と見ると、きたないもきたなくもないもある段じゃない。どうでも構わないから、どうとも勝手にするがいい、自分が懐手をしていたら運命が何とか始末をつけてくれるだろう。死んでもいい、生きてもいい。華厳の瀑などへ行くのは面倒になった。東京へ帰る？ 何の必要があって帰る。どうせ二三度咳をせくうちの命だ。(…省略…) ふと往きに眼に附いた蒲公英に出逢った。さっきは勿体ない程美しい色だと思ったが、今見ると何ともない。

何故これが美しかったんだろうと、しばらく立ち留まって、見ていたが、やっぱり美しくない。(…省略…) 例の通り長屋から、坑夫が頬杖を突いて、自分を見下している。さっきまではあれ程厭に見えた顔がまるで土細工の人形の首の様に思われる。醜くも、怖くも、憎らしくもない。(p.212-3.)

地上では漠然と「逃げ場」だと考えていた鉱山は、そこへたどりついてみると到底「逃げ場」たりえず、「逃げ場」というのは幻想に過ぎず、結局は自分の心の持ち方次第であることに気づく。この世界は地上では自分を癒してくれる場のように思われるが、いざ地下の世界にはいってみると、地獄のような世界がひろがっている。それも心の持ち方によって醜く見えたり、そうでもなかったりするのだった。

漱石は、ロンドン留学中、非常に不愉快な思いにさいなまれ、神経衰弱に陥り、土井晩翠ら留学仲間が心配して、漱石にとっては、おせっかいにも文部省に早期の召還を依頼したと言われている。漱石は、自分の人生の中でこれまで体験し得なかった異文化の世界に放り出されることによって、『坑夫』の主人公と同じく全く不条理なものを感じたはずである。後に引くこともできず、これ以上どうしようもないという切羽詰まった状況の中でこれまで得てきた知識も経験も役に立たない無力さを感じた。日本にいれば一人前の大人で、しかもいっかどの学者である人間が、異文化の中ではたちまち子供以下のレベルに成り下がるような無力感にとらわれたのである。『坑夫』の主人公は、自らの招いた災いの始末をつけきれず、そうでなければ裕福な家でのうのうと暮らせる生活を棄てて家を飛び出し、自分のこれまでの人生での知識も経験も全く役に立たぬ鉱山に来てしまうことになる。そうして彼の目には、周囲の人間が彼のことを嘲っていると強く感じるのだが、ロンドン留学中の漱石も周囲の人々の無理解に苦しむことが多々あったようである。漱石は、文部省から帰国命令が下ったにもかかわらず、これを「待ってました」とばかりに帰国した訳ではなく、むしろもう少しイギリスにいてもよいとまで思うようになっていた。そうして命令が下ってから、一ヶ月たってからようやく帰国の途についている。漱石は『文学論』の序の中でイギリスでの滞在が不愉快であったと述べているが、驚くべきことに「帰国後の三年有半もまた不愉快な三年有半なり」と述べ、日本に帰ってきてからの生活が逆カルチャーショックであったことも告白している。漱石は自身のいう「自己本位」を留学の末に確立しつつあったが(p.224)、帰国後、今度は日本で「自己本位」を確立し得ない状況に遭遇し、いらだったのであろう。だが漱石の創作活動という点においては、帰国後本格的に始まったとあって差し支えあるまい。

## 留学の成果とゆくえ

一人の人間が漱石の英国留学のように強烈な経験をしたとき、これが良きにつけ悪きにつけ、なんらかの形でこの人の人間形成の一部を成さないと考えるのはむづかしい。漱石の作家としてのスタートは、他の作家にくらべて遅いとはいえ、その著作活動は、英国留学後に始まる。漱石の作品の中に、どれほどこの留学の異文化体験の影響が見られるのか考察してみたい。これまでの研究では、漱石がこの留学によって英文学から、自己の多くの著作に影響を受けたとする説と、さほど英文学の影響を受けていないという説がある。齊藤恵子氏の「比較文学研究」(『夏日漱石必携』別冊国文学No.5)が諸説を紹介している。その中で英文学者、中野好夫氏の分析を紹介して、

中野は、英文学者としての漱石の仕事と、作家としての漱石の影響の二つに分けて考え、前者については、『文学論』、『文学評論』を中心に、漱石の造詣の深さ、その読みの独創性を欠点も含めて測定して正しく評価しているが、後者については、深い意味での影響はないと結論する。漱石の文学の展開の主動機は彼の強烈な個性にあり、影響の深さは、むしろ漢文学か儒教文学が深部にあろうと。(p.139.)

中野氏が否定的であるのに対して、齊藤氏は続けて別の意見を紹介し、

漱石と英文学とのかかわりについては、英文学者山内久明の「英文学者としての道を棄てた漱石が、作家として日本文学に新境地を開くのに、英文学は絶大な意味を持った」（『朝日小事典 夏目漱石』朝日新聞社、昭52）という言葉に同意する。そしてそれを証明するに足る研究がいくつもあらわれているのである。（p.140.）

というように、この意見に妥当性を見出ししている。無論、夏目漱石論で文壇に登場した江藤淳氏も紹介されているが、自身が英文学を専攻した江藤氏による、漱石のアーサー王伝説に題材を求めた『薙露行』の分析については、疑義も唱えている。比較文学者、平川祐弘氏については、「屈折した留学体験のみならず作家としても自国の文学的伝統と西洋文学の圧力の間でもがきながら自己の文学を確立していった。」という意見を好意的に紹介している。（p.141.）

漱石は無論、西洋の文化の中に自己の痕跡も残さぬほど埋没することをとうてい肯定しえなかったが、逆にそれを完全に否定して無視するという態度もとっていない。彼は自分以外のものを知る大切さを自己の英国留学の体験から引き出し、ひいては、もっと身近な「異文化」についてもそれを認めることの大切さに気づいた（「作家の態度」、『文芸の哲学的基礎』、p.89）。「自己本位」を認識した上で、自己と価値観の異なる者に触れることは、大いに意義があるということ。長期的に見て「自己本位」なしには、その価値はほとんどないということ留学から得たのである。

近代的な自我という意識が定着していなかった日本の文化そして文学の中に、その意味を問いかけさせたのは、まさに、英国での生活、そして西洋の書物の耽読によって培われた精神であったと筆者は考える。また漱石は文壇からは孤立していたと言われているが、筆者はこれが漱石の異文化との接触によって彼になさしめた「自立」であると考え。漱石は、「[個人主義とは] 党派心がなくて理非がある主義なのです。朋党を結び団体を作って、権力や金力のために盲動しないという事なのです」（「私の個人主義」、『漱石文明論集』、p.130）と述べているが、これはまさしく英国の「個人主義」を経験して、自己のなかで反すうした上で到達した思想なのである。この小論では、漱石の英文学者としての出発点まで遡り、彼が異文化をそれ以前から考えていたというよりも、留学により異文化に触れることによって弁証法的に、独自に自己に依拠するところを築きあげていったという点について考察したものである。

## 参考文献

- 江藤 淳 『漱石とその時代』第一部、新潮選書、1970年。  
 小森陽一 『漱石を読み直す』、筑摩書房、1995年。  
 ——— 『世紀末の予言者・夏目漱石』、講談社、1999年。  
 竹盛天雄編 『夏目漱石必携』別冊国文学No.5. '80冬季号、学燈社、1980年。  
 ——— 『夏目漱石必携』別冊国文学No.14. '82、学燈社、1982年。  
 塚本利明 『漱石と英国』彩流社、1999年。  
 ——— 『漱石と英文学』彩流社、1999年。  
 夏目漱石 『坑夫』新潮社、1996年。  
 ——— 『漱石全集 第13巻』「日記及断片」岩波書店、1975年。  
 ——— 『漱石全集 第14巻』「文学論」岩波書店、1995年。  
 ——— 『漱石文明論集』三好行雄編、岩波文庫、1999年。  
 ——— 『夏目漱石集（二）』、筑摩書房、1975年。

- 夏目漱石 『夏目漱石全集10』ちくま文庫、1999年。  
—— 『文芸の哲学的基礎』講談社、1998年。  
藤田栄一 『漱石と異文化体験』和泉選書、1999年。